

せんしじだい

こくようせき

ひと

かか

先史時代における黒曜石と人との関わり

黒曜石の最大の特徴は、容易に鋭利な切片を得られることです。そのため、後期旧石器時代(約4万年～約1万2千年前)や、その後の縄文時代(約1万2千年～約2千4百年前)といった先史時代の人々は、黒曜石を石器の材料として利用することに早い時期より着目していました。

最初、彼らはマンモスをはじめとする大型哺乳類などを捕獲するため、細石刃(さいせきじん)と呼ばれる石器を考え出しました。これは黒曜石を割ってつくった小さなカミソリのような石器で、旧石器時代の終わり頃、東アジア一帯で盛んに使用されていました。これを弾力性のある動物の骨や棒に幾つも埋め込んで槍などの道具として利用していたと考えられています。



細石刃(旭川市博物館所蔵)



石鏃(旭川市博物館所蔵)

やがて、温暖化に伴う草原の減少と森林化により大型動物が激減し、今度はシカ・イノシシ・タヌキ・ネズミといった小動物を狩猟するため、黒曜石を刺突する尖頭器(せんとうき)などの矢じりの原材料として黒曜石を利用することを考えました。又これとは別に少し大き目につくられた尖頭器は、人間同士の争いのためにも使用していたと考えられています。

更に、石器の形状はしていても実用的ではなく、装飾品として使われていたと考えられる遺物が多数発掘されています。また、交易によって黒曜石が広範囲にわたり流通していたことから一種の通貨の役割り、若しくはモノの価値基準を担っていた可能性も考えられます。

これらのことを総合して考慮しますと、黒曜石は、先史時代の人々の日常生活において疑うことなく身近なものであり、重要かつ貴重な石材であったと容易に推測できます。

(学芸員 向井 正幸)



地学 Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

